

【14】^{いっぺんしやうにん}一遍上人^{しやうがい}の生涯 (33)

この地の住人であります中務入道という人がやってきて「今日は西ノ宮のお祭りであります、もし上人が今日ご臨終であるならばこの土地の者はお祭りに参る事が出来ません、どうしたらよいでしょうか。」と申しあげましたので上人は「それでは今日は臨終せずに日延べしよう。」と応えられました。

一遍上人は、日中の法要が終わってからしばらくとうとうととしていましたが目を覚まされ「ただいま西ノ宮の大明神が最後の結縁しようとおいでになられたので目を覚ました」と仰っているところに、西ノ宮の神主がやって来られ「昨年西ノ宮に参詣頂いて以来お慕い申し上げて参りましたが、ご臨終であるとお伺いしましたので、お十念をお受けしたいと思って急ぎやって参りました。」と申しあげました。

一遍上人は西ノ宮の神主を招き入れ、お十念を授けられ、さらにお数珠を授けられました。神主はお受け頂き急いで帰りました。これが人々に授けられた最後のお十念になりました。神も別れを惜しまれたのでしょうか。

同じ日、播磨の淡河殿という婦人が参られてお授けになられたのが最後のご賦算（念仏のお札を与える事）となりました。

おおよそ十六年の間、遊行の旅で人々に与えた念仏のお札は、帳面に記録された人数で25万1724人に上りました。その他に結縁された人々の数は数える事も記録する事も出来ないほどで有りました。

一遍上人は、平素は3日に一度でありました水垢離を20日から22日まで毎日されました。私聖戒は、一遍上人が往生なされるのは間違いのないと思ひ、今までは枕元に座って看病していたのを、最後の夜は足元の方から正面に向かつて片時も目を離さずにお護り申し上げたのです。

一遍上人は51歳になられました。8月23日の午前七時頃、晨朝礼讃の帰三宝が唱えられている間に呼吸が止まったように見受けられましたが、禅定に入られているように静かに往生なされたのでした。

目の中はさわやかで赤いものもありません。前から仰っていた事とと少しも違いがありませんでした。

一遍上人は「良き武士と良き道者とは。自らの死ぬ様をむやみに知らせないものだ。私の死ぬ時を人は分からないだろう。」と言われていました。そのことを疑った人もいましたが、その言葉通りでありました。

このほか、病中に不思議な事が沢山ありましたが、繁雑になりますので書き記さない事にしました。次回に続く